



◇コンテナ苗の普及・試験の取り組み ・コンテナ苗見学会

平成26年4月23日、岐阜署下呂市の高天良国有林において「ヒノキコンテナ苗見学会」を開催しました。

コンテナ苗は、植付作業の省力化により、コスト縮減が図れるとして近年、全国的にその取り組みが進められていますが、スギを導入した事例が多く、当地域の主要樹種であるヒノキの事例が少ない状況の下、県内の地方公共団体や林業団体等約30名の参加がありました。

はじめにコンテナ苗の特徴や国有林での導入状況、岐阜県の試験研究の状況等を説明し、その後、コンテナ苗用に関与された様々な植付器具を使って植付作業を体験して頂き、参加者からは「植えやすい」、「扱いが容易」、「植付器具の違いがよくわかった」等の感想がありました。



現地説明



スパードによる植付



宮城苗組式ディブルによる植付



様々な植付器具

・試験地設定(技術開発課題:ヒノキコンテナ苗による低コスト再造林のための植栽・初期保育技術の開発)

コンテナ苗見学会を実施した高天良国有林において、岐阜県森林研究所と共同で植栽技術・育苗履歴の違いによる初期成長等の実証試験に着手しています。



岐阜県森林研究所試験地（急傾斜地）



当センター試験地（緩傾斜地）
4月春植 0.10HA 300本



当センター試験地
7月31日撮影 春より3.5cm成長



7月31日、炎天下の夏植え試験



夏植え用のコンテナ苗

11月上旬に春植え試験地の隣に秋植え試験地を設定し、植付時期の違いによる成長状況等の調査を行うこととしています。

・コンテナ苗植栽功程調査

中部森林管理局管内の各署で実施されたコンテナ苗植栽功程調査について、結果をとりまとめることとしています。



岐阜署
高天良国有林
皆伐跡地における功程調査の様子
(急傾斜地)



東濃署
湯舟沢国有林
皆伐跡地における功程調査の様子
(中傾斜地)



飛騨署
山中山国有林
皆伐跡地における功程調査の様子
(緩傾斜地)

東濃署
加子母裏木曾国有林
ササ生地における更新補助作業(補助植込み)の功程調査の様子



◇森林作業道技術研修

6月10日～11日の2日間、岐阜署管内の越原及び乗政国有林において、資源活用課主催の森林作業道技術研修を実施しました。この研修は、低コスト作業システムを目指した森林作業道の技術を習得させ、事業体の監督・指導を実施できる知識・能力の向上を図ることを目的として、中部局管内各署の森林官等15名が参加しました。研修生は3グループに分かれ、路線開設時のポイントの検討や、路線選定ポイントの検討の現地実習、検討結果の発表を行い、当センターでは講師、運営等で研修をサポートしました。



現地実習の様子

◇技術者育成研修

林野庁では、我が国の成長戦略の一つである森林・林業の再生を通じて雇用や環境にも貢献する政策推進の一環として、森林総合監理士（フォレスター）育成のため、その候補者となる技術者育成を実施しています。中部ブロック研修は当センターを研修拠点に、周辺の国有林をフィールドにした現地実習等を主体に行っています。

今年度の中部ブロック研修は、9月9日～12日の4日間、中部森林管理局管内の4県（富山、長野、岐阜、愛知）のほか、石川県、福井県、三重県の県・市町村職員21名及び国有林職員6名あわせて27名が研修を受講しました。



下呂市内研修会場



乗政国有林 森づくりの構想実習



七宗国有林 資源循環利用構想策定実習



林業専用道と木材供給ビジョンの検討

◇樹幹解析:年輪板の読み取り作業の紹介

平成23年度以降、「長伐期施業における樹冠長率を指標とした森林管理技術の開発」との課題に取り組んだ結果、長伐期施業では、健全性の失われた脆弱な林型にならないよう、樹冠サイズを維持できる適正な間伐等を実施する必要があるが、林齢に見合う径級の木を育てるには、相應の密度管理が必要なが示唆されました。

今後、どの時点でどの程度の間伐が必要であるか判断できるモデルの作成に向け、岐阜県立森林文化アカデミー横井教授と協同で取り組んでいる年輪板の読み取りについて紹介します。



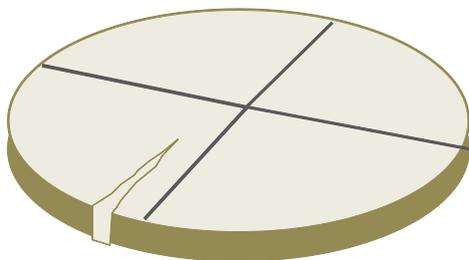
産地、林班及び年輪板の高さを記入



各国有林より採取した2m刻みの年輪板



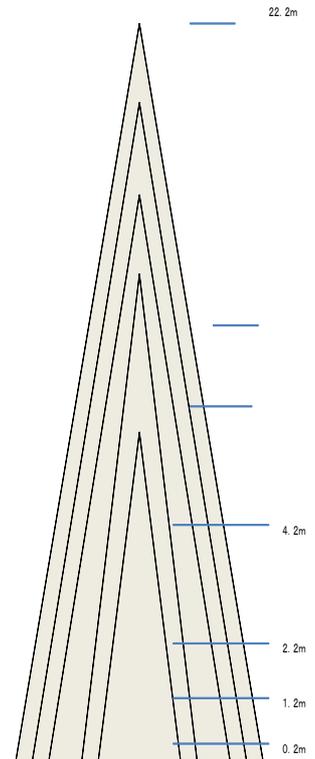
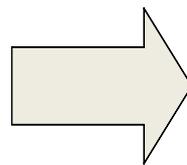
読み取り顕微鏡による読み取り



4方向の年輪幅を読み取り、平均値を算出し
中心からの平均値を左右に図化



林齢ごとの材積計算、成長量の計算、胸高直径成長量、樹高成長量など今までの成長経過から、成長量の変化がわかり、その分析により将来の森林施業の基礎資料を得ることができます



樹幹解析図

◇試験地(指標林)の紹介

～小川長洞国有林複層林下木の本数調整～

非皆伐施業により森林の公益的機能の維持を図りつつ、ヒノキ大径材生産、東濃ヒノキ優良材生産を行い、併せて下木の生育状況、伐採搬出による下木の損傷状況を観察し、複層林施業の基礎資料とすることを目的に常時2段林の指標林として昭和50年から設定しています。

現状は上木(林齢119年生)が疎、下木(林齢39年生)が密となっていることから、上木の配置、樹冠幅等に応じて下木の配置を検討し、下木の本数調整を行いました。今後は下木の成長、下層植生の回復等を経過観察していくこととしています。

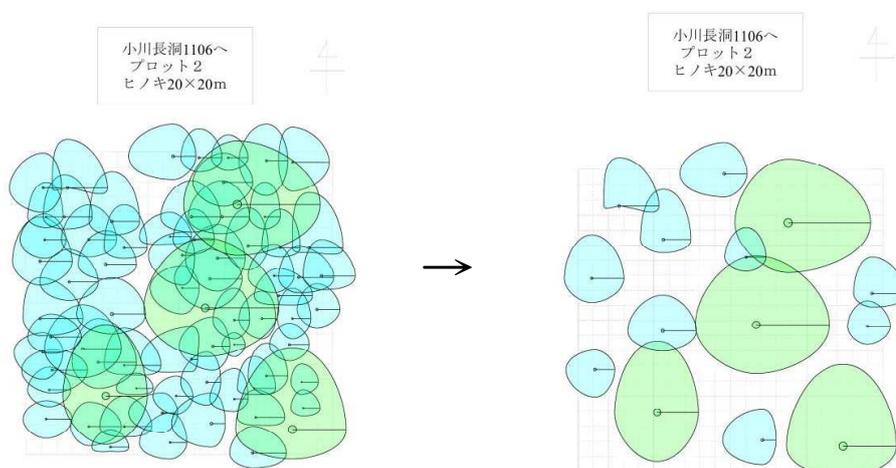


本数調整前



本数調整後

樹冠投影図



下層植生被覆度、植生数の調査